



国立公文書館	
分類	
	② ④
配架番号	3 A
	14
	79-4

#14215
N.R.

軍事極秘

情報主任者會同席上
配布書類 其ノ十

1 OCT 17
Copy 1947

對外情勢一般觀察

司令部中第161號

昭和十七年十月十一日
北支那方面軍參謀部

国立公文書館	
分類	
配架番号	79-4

對外情勢一般觀察

目次

第一要旨	一頁
第二 東亞情勢	三頁
一 重慶政權ノ動向	三頁
(一) 要旨	三頁
(二) 重慶側一般情勢	四頁
(三) 重慶政權ノ抗戰力	五頁
(四) 重慶側軍事情勢	八頁
(五) 重慶ノ西北中央化工作 (別冊)	
(六) 最近ノ在支空軍ノ狀況 (別冊)	
(七) 重慶ノ印度問題ニ對スル態度	一〇頁
(附) 對中共施策	一〇頁

二 太平洋ノ戰況	一三頁
三 印度問題	一四頁
(一) 印度ノ對英抗爭政策ト英國ノ態度	一四頁
(二) 印度問題ノ各國ニ及ホセル影響	一五頁
三 獨ソ戰ヲ中心トスル歐洲情勢	一八頁
一 今次獨ソ戰ノ特質	一八頁
二 獨ソ戰ノ推移ト其ノ概況	一八頁
三 獨軍今後ノ作戰ニ對スル考察	二〇頁
四 ソ聯情勢	二二頁
(一) ドンパス及北コーカサス喪失ノソ聯ニ與フル影響	二二頁
(二) 對英米關係	二五頁
(三) 對極東動向	二六頁
第四 米英情勢	二八頁

一 米英最近ノ動向	二八頁
二 英米ノ船舶不足問題	三〇頁
(一) 喪失船舶量ト補給可能量	三〇頁
(二) 英國ノ絕對必要船舶量	三一頁
(三) 船舶不足ノ影響	三二頁
(四) 第二戰線問題	三二頁
第五 北阿及西亞情勢	三四頁
一 北阿戰ノ特色ト推移	三四頁
(一) 北阿戰ノ特色	三四頁
(二) 北阿戰ノ推移狀況	三五頁
(三) 北阿戰ト埃及ノ動向	三七頁
二 西亞近東狀況	三八頁
(一) 西阿ニ於ケル英蘇ノ配置兵力	三九頁
(二) 土耳其ノ動向	四一頁

一	米英最近ノ動向	二八頁
二	英米ノ船舶不足問題	三〇頁
	(一) 喪失船隻ノ補給可能量	三〇頁
	(二) 英國ノ絕對必要船舶量	三一頁
	(三) 船舶不足ノ影響	三二頁
	(四) 第二戰線問題	三二頁
第五	北阿及西亞情勢	三四頁
一	北阿戰ノ特色ト推移	三四頁
	(一) 北阿戰ノ特色	三四頁
	(二) 北阿戰ノ推移狀況	三五頁
	(三) 北阿戰ト埃及ノ動向	三七頁
二	西亞近東狀況	三八頁
	(一) 西阿ニ於ケル英蘇ノ配置兵力	三九頁
	(二) 土耳其ノ動向	四一頁

一	緒言	一頁
二	第一章 東亞の現状	一頁
三	第二章 東亞の将来	一頁
四	第三章 東亞の地勢	一頁
五	第四章 東亞の歴史	一頁
六	第五章 東亞の政治	一頁
七	第六章 東亞の経済	一頁
八	第七章 東亞の文化	一頁
九	第八章 東亞の宗教	一頁
十	第九章 東亞の民族	一頁
十一	第十章 東亞の言語	一頁
十二	第十一章 東亞の文学	一頁
十三	第十二章 東亞の美術	一頁
十四	第十三章 東亞の音楽	一頁
十五	第十四章 東亞の演劇	一頁
十六	第十五章 東亞のスポーツ	一頁
十七	第十六章 東亞の科学	一頁
十八	第十七章 東亞の技術	一頁
十九	第十八章 東亞の教育	一頁
二十	第十九章 東亞の法律	一頁
二十一	第二十章 東亞の政治	一頁
二十二	第二十一章 東亞の経済	一頁
二十三	第二十二章 東亞の文化	一頁
二十四	第二十三章 東亞の宗教	一頁
二十五	第二十四章 東亞の民族	一頁
二十六	第二十五章 東亞の言語	一頁
二十七	第二十六章 東亞の文学	一頁
二十八	第二十七章 東亞の美術	一頁
二十九	第二十八章 東亞の音楽	一頁
三十	第二十九章 東亞の演劇	一頁
三十一	第三十章 東亞のスポーツ	一頁
三十二	第三十一章 東亞の科学	一頁
三十三	第三十二章 東亞の技術	一頁
三十四	第三十三章 東亞の教育	一頁
三十五	第三十四章 東亞の法律	一頁
三十六	第三十五章 東亞の政治	一頁
三十七	第三十六章 東亞の経済	一頁
三十八	第三十七章 東亞の文化	一頁
三十九	第三十八章 東亞の宗教	一頁
四十	第三十九章 東亞の民族	一頁
四十一	第四十章 東亞の言語	一頁
四十二	第四十一章 東亞の文学	一頁
四十三	第四十二章 東亞の美術	一頁
四十四	第四十三章 東亞の音楽	一頁
四十五	第四十四章 東亞の演劇	一頁
四十六	第四十五章 東亞のスポーツ	一頁
四十七	第四十六章 東亞の科学	一頁
四十八	第四十七章 東亞の技術	一頁
四十九	第四十八章 東亞の教育	一頁
五十	第四十九章 東亞の法律	一頁
五十一	第五十章 東亞の政治	一頁
五十二	第五十一章 東亞の経済	一頁
五十三	第五十二章 東亞の文化	一頁
五十四	第五十三章 東亞の宗教	一頁
五十五	第五十四章 東亞の民族	一頁
五十六	第五十五章 東亞の言語	一頁
五十七	第五十六章 東亞の文学	一頁
五十八	第五十七章 東亞の美術	一頁
五十九	第五十八章 東亞の音楽	一頁
六十	第五十九章 東亞の演劇	一頁
六十一	第六十章 東亞のスポーツ	一頁
六十二	第六十一章 東亞の科学	一頁
六十三	第六十二章 東亞の技術	一頁
六十四	第六十三章 東亞の教育	一頁
六十五	第六十四章 東亞の法律	一頁
六十六	第六十五章 東亞の政治	一頁
六十七	第六十六章 東亞の経済	一頁
六十八	第六十七章 東亞の文化	一頁
六十九	第六十八章 東亞の宗教	一頁
七十	第六十九章 東亞の民族	一頁
七十一	第七十章 東亞の言語	一頁
七十二	第七十一章 東亞の文学	一頁
七十三	第七十二章 東亞の美術	一頁
七十四	第七十三章 東亞の音楽	一頁
七十五	第七十四章 東亞の演劇	一頁
七十六	第七十五章 東亞のスポーツ	一頁
七十七	第七十六章 東亞の科学	一頁
七十八	第七十七章 東亞の技術	一頁
七十九	第七十八章 東亞の教育	一頁
八十	第七十九章 東亞の法律	一頁
八十一	第八十章 東亞の政治	一頁
八十二	第八十一章 東亞の経済	一頁
八十三	第八十二章 東亞の文化	一頁
八十四	第八十三章 東亞の宗教	一頁
八十五	第八十四章 東亞の民族	一頁
八十六	第八十五章 東亞の言語	一頁
八十七	第八十六章 東亞の文学	一頁
八十八	第八十七章 東亞の美術	一頁
八十九	第八十八章 東亞の音楽	一頁
九十	第八十九章 東亞の演劇	一頁
九十一	第九十章 東亞のスポーツ	一頁
九十二	第九十一章 東亞の科学	一頁
九十三	第九十二章 東亞の技術	一頁
九十四	第九十三章 東亞の教育	一頁
九十五	第九十四章 東亞の法律	一頁
九十六	第九十五章 東亞の政治	一頁
九十七	第九十六章 東亞の経済	一頁
九十八	第九十七章 東亞の文化	一頁
九十九	第九十八章 東亞の宗教	一頁
一百	第九十九章 東亞の民族	一頁
一百〇一	第一百章 東亞の言語	一頁
一百〇二	第一百〇一章 東亞の文学	一頁
一百〇三	第一百〇二章 東亞の美術	一頁
一百〇四	第一百〇三章 東亞の音楽	一頁
一百〇五	第一百〇四章 東亞の演劇	一頁
一百〇六	第一百〇五章 東亞のスポーツ	一頁
一百〇七	第一百〇六章 東亞の科学	一頁
一百〇八	第一百〇七章 東亞の技術	一頁
一百〇九	第一百〇八章 東亞の教育	一頁
一百一〇	第一百〇九章 東亞の法律	一頁
一百一〇	第一百一十章 東亞の政治	一頁

第一要旨

東亞ニ於ケル日本ノ必勝不敗態勢ノ確立ト今次獨軍作戦ノ偉大ナル戰果トハ樞軸側ノ壓倒的優勢ヲ如實ニ顯現シ世界情勢ヲシテ刻々世界新秩序建設ノ大事業達成ニ向ヒ進展變革セシメツツアルハ同慶ニ堪ヘサル所ナリ

米英ノ焦慮シアル戦力擴充モ大規模ナル反抗態勢確立ノ爲ニハ尙一九四三年以後ニ俟タサルヲ得サルヘク其間ニ於ケル自國ノ窮乏ハ固ヨリソ聯及ヒ重慶ノ急激ナル情勢變轉亦豫期セサルヲ得ス 加之印度、西亞、北阿ノ類勢激化ヲ考慮スル時反樞軸側ノ戰爭指導ハ今ヤ完全ニ消極防勢ニ立チアリテ其不安ト焦慮トハ察スルニ難カラス世界戰爭ノ歸趨モ決定的段階ニ近ツキツツアルヲ行^思ハシムルモノアリ

故ニ斯カル國際情勢ヲ巧ミニ利用シ武力的、經濟的壓迫ヲ益々加重ス

ルニ於テハ重慶抗戰陣營ノ屈伏乃至ハ分裂崩壊ヲ招來シ東亞大陸ニ於ケル早期戰爭解決ノ方策モ其ノ公算少シトセサルヘシ
然レトセ米英ニ於ケル政府主腦者ノ強力ナル獨裁的戰時統制ト統制下ニ於ケル長期戰態勢ノ確立就中一九四三年乃至一九四四年以降ノ反攻ヲ目途トスル軍備擴充並ニ軍事的反攻據點確保ニ關スル熱意トハ容易ニ輕視ヲ許サルル所ナリトス
以下項ヲ分チテ若干觀察ヲ述ヘントス

第二 東亞情勢

一 重慶政權ノ動向

（一）要旨

重慶政權ハ反樞軸國側ノ究極ニ於ケル勝利ヲ確信シ之ト步調ヲ併セツツ抗日民族意識昂揚ヲ策シ抗戰繼續ニ邁進スヘク未タ抗戰放棄ノ徵候ヲ認メ得ス
然レ共大東亞戰開始以來ノ客觀的情勢並ニ獨蘇戰ノ推移ハ重慶ヲシテ抗戰繼續上幾多困難ナル結果ヲ齎ラシメタルヲ以テ此際一步ヲ進メ重慶ノ中心武力及ヒ抗戰機構ニ對シ破摧的打撃ヲ與ヘ之ト併行シテ適切ナル政治經濟思想謀略ヲ積極的ニ施策スルニ於テハ重慶抗日戰體制分裂乃至崩壊ナル敗戰現象ヲ招來セシメ得ルモノト觀察ス

(一) 重慶側一般情勢

重慶政權ハ内民族意識ノ昂揚、抗戰體勢ノ確立ニ努力シ外反樞軸國家群トノ共同及ヒ其ノ救援ニ依頼シツツ抗戰持久ヲ劃策シツツアリ、然レ共客觀的情勢ハ直チニ米英蘇等ノ強大ナル外的援助ヲ期待シ得サルヘク重慶ハ反樞軸國家ノ來年度乃至ハ明後年初頭ニ於ケル對樞軸國總反攻ノ實現マテニ我カ大攻勢ノ可能性アルヲ懸念シ目下極力防勢持久ノ對策ニ腐心シアルモノノ如シ

而シテ重慶政權ハ目下極力東亞情勢ノ緊要性ヲ吹聴シツツ米英ノ對日攻勢移轉並ニ蘇聯ノ對日即時開戰ヲ慫慂シツツアリト雖モ米英ハ目下辛シテ空軍ノ一部、財政物資上ノ援助ヲナシ得ル程度ニ過キス蘇聯亦最近ノ歐洲戰局ノ推移ニ鑑ミルトキ敢テ對日開戰ノ愚乃至ハ對支積極的援助ノ實行ハ期待シ得サルヘク重慶ノ焦躁ト

(三) 重慶政權ノ抗戰力

不滿トハ極度ニ昂マリツツアルモノノ如シ

茲ヲ以テ重慶政權ハ反樞軸國側ノ最後の勝利迄戰爭持久ヲ策スル爲自力抗戰ノ必要ヲ痛感シ之レカ實現ニ努力シツツアリテ將來米蘇等ノ敗退ヲ看ルモ重慶カ直チニ以テ抗戰放棄ニ至ルヘシトハ判斷シ得サルヘシ

重慶政權抗戰力ノ本質ヲナスモノハ抗日民族意識、粘着持久ノ民族性、蔣介石ヲ民族的英雄トスル團結統制力ナリ、之等無形の戰力ハ戰爭繼續ト共ニ未タ衰微ノ徵ヲ見ス依然トシテ旺盛ナル傾向ニ在ルヲ認メラル

他方人の物的資源ノ豊富、民族ノ原始的環境適應性、地域ノ廣大

交通未發達等モ亦彼ノ防衛抗戰力維持ノ爲重要ナル因子ナシアリ

就中蔣介石ノ抗戰統制力ハ從來培養シ來レル民族意識ヲ巧ミニ利用シ全體主義的政治力ノ強化ニヨリ依然トシテ強力ニシテ假令内部ニ一部反蔣反戰的分子存在スト雖モ之等ヲシテ容易ニ大勢ノ支配ヲ許ササルモノト觀察セラル

重慶政權ハ右ノ政治力ヲ以テ各種ノ政治、經濟上ノ施策ヲ實行ニ移シ財務行政ノ中央集權自給經濟ノ確立、國家總動員法ノ實行等抗戰持久ニ努力シツツアリ

就中印度ヨリ西康省乃至西北ル一トニヨル空陸輸送方法ノ整備ハ戰力維持ノタメ輕視スヘカラサル事象タリ

最近米貨五億弗、英貨五千萬磅ノ借款ヲ得インフレノ危機ヲ防止シ重慶戰爭經濟ノ破綻ヲ彌縫スル等ノ手段ヲ盡シツツアルヲ以テ經濟破綻ニヨル政權崩壞ノ如キハ遠ニ之ヲ期待シ得サルヘシ

以上ノ如ク重慶政權抗戰ノ根柢性ハ極メテ看ルヘキモノアリ然レ共重慶政權ハ大東亞戰以來對日抗戰ノ名義ニ動搖ヲ與ヘラレ同時ニ國民政府ノ存在カ益々正當化ツケラルルニ至リタルヲ以テ此處ニ政治的動搖ノ一素因ヲ醸成シツツアルハ否定シ得サル所ニシテ國民政府ノ意義ト其ノ將來性ハ重慶抗戰ノ途上ニ益々重大ナル影響ヲ與フヘシト思考セラル

(參考)

重慶ノ對内施策ノ一端

重慶政權ハ益々國內ノ統制ヲ強化シ抗戰陣營ノ再編成ヲ行フト共ニ五月五日國家總動員法ヲ發布シ抗戰組織ノ整備強化ヲ企圖シアリ

稅制ノ改正、中央銀行ノ統制權強化、公債ノ強制購入等金融界ノ統制並ニ糧食ノ登記、糧食ノ賣惜、買溜ノ取締、我占領

地域トノ間ノ物資交流制限ノ撤廢ニヨル物資不足ノ緩和等強
力ナル統制ニヨリ抗戰財政經濟ノ危局ヲ打開セントシアリ
尙最近ハ十五歳以上三十九歳迄ノ男子ニ對シテハ特例ナク強
制的ニ軍事訓練ヲ施シツツアリ

(四) 重慶側軍事情勢

重慶側抗戰力ノ早期崩壞ヲ期待シ得ヘカラサルコト前述ノ如シ
然レ共右ハ武力ヲ中心トシテ辛フシテ之ヲ維持シアリトイフニ過
キス又其ノ武力自體ニ於テモ持久防衛ニ汲々タルノ域ヲ脱セサル
ハ明カナル所ニシテ之ヲ以テ對日大攻勢ノ實力アリト判斷シ得サ
ルヘシ

蔣中正ハ本年秋季以降反攻ヲ目途トシ整訓ニ勉メ來リシカ如キモ
右ハ單ニ國際情勢之レヲ許スニ至レハトノ消極的意圖ヲ包藏スル
ノミニシテ目下彼等ノ取り得ル唯一ノ手段ハ依然トシテ退避作戰

游擊、特務戰其他ノ謀略的行動等ニ過キス假令反樞軸國軍ノ對日
第二戰線ノ結成ヲ看ルコトアリト雖モ重慶軍ハ單ニ之ニ策應シテ
某線ニ於テ防勢的或ハ牽制的戰略展開ヲナシ據點攻撃及ヒ游擊戰
ヲ演スルノ程度ニ過キサルヘシ
但シ米英ノ印度經由對支空軍援助ハ今後某程度増大ノ可能性アリ
ト判斷セラレ輕視ヲ許ササルモノアリト觀察ス
之ヲ要スルニ現狀ノ權推移スルニ於テハ彼ノ微弱ナル軍力ト雖モ
克ク抗戰力ノ中樞トシテ長期抗戰ヲ統制シツツアリテ遠カニ之カ
自然崩壞ヲ期待シ得サル所ナルヘシ 然レトモ我カ強力ナル軍事
力ノ發動ニ依リ其ノ軍事中樞ニ一大打擊ヲ與フルニ於テハ爾他ノ
諸施策ト相俟チテ全面的抗戰體制ノ分裂乃至ハ崩壞ニ導入スルノ
可能性亦大ナルモノアリト觀察セラル

(五) 重慶ノ西北中央化工作(別冊)

(六) 最近ノ在支空軍ノ狀況 (別冊)

(七) 重慶ノ印度問題ニ對スル態度

印度ノ騷擾激化ハ援蔣物資補給上直接的影響ヲ受クルノミナラス更ニ從來對印政策上採リ來リシ理念ト英國側ニ對スル關係トノ極メテ微妙且矛盾セル苦境ニアリ 重慶ノ抗戰理念タル「民族自由標榜」ノ對内政略上ノ影響ヨリシテ極メテ慎重ナル態度ヲ持セサルヲ得ス之カ爲重慶ハ一面政府責任者ノ發言ヲ避クルト共ニ他面言論機關ヲシテ對印同情的論調ヲ表示セシメ以テ努メテ施策ノ自由ヲ留保セント意圖シアルモノノ如ク英側ノ對印彈壓ニ關シテハ其ノ措置ヲ遺憾トスルモ干涉ハ避ケアルカ如シ

(附) 對中共施策

重慶政權屈服後ニ於ケル支那情勢ヲ考察スルニ從來根強ク植エ付ケラレタル抗日思想特ニ抗戰五年餘ニ亘リ現實的ニ

體驗シ遂ニ信念化セントスル反日民族思想ハ相當根強ク殘存スルモノト觀察セラレ而シテ中共ハ巧ミニ此レカ民族思想ヲ領導シテ抗日戰ヲ呼號シアリテ重慶トハ自ラ別個ノ政權トシテ爭亂ノ禍源ヲナシツツアリ從テ重慶屈服後ニ於テ直ニ日支全面和平ノ現象招來ヲ所期スルハ中共獨自ノ抗戰力ヲ過小評價セシモノト謂フヘク極メテ安逸ナル希望的觀測ナリト思考セラル

茲ヲ以テ重慶屈服後ノ將來ヲ洞察シ現在ヨリ透徹一貫セル對中共施策ヲ確立シ自主的ニ着々實施ニ移スノ要アルモノト信ス

(三) アリゾーシヤン方面ニ於テハ米軍ハ八月八日鳴神島(キスカ)ニ戦艦一、航母一、重巡四、驅逐一〇ノ有力ナル艦隊ヲ以テ來襲シ來レルノ他最近同方面ニ於テハ空中偵察、地上掃射、爆撃等ヲ執働ニ反覆シ以テ我カ守備兵力及今後ノ企圖偵知ニ勉メツツアリ

(四) 米國ハ目下着々日本々土ニ對スル空襲ヲ準備シツツアリテ軍備充實ノ重點ヲ艦船ヨリ空軍第一主義ニ轉換シ明年後半期以降航空機ノ増産整備ニ伴ヒ大規模ナル空襲ヲ企圖シアルモノノ如シ

殊ニ濠洲基地ヲ強化シテ熾烈ナル航空消耗戰ヲモ意トセス之ヲ敢行シ漸次對日攻勢力ヲ培養シツツ太平洋諸島ノ奪回ヲ策スヘキ公算勘シトセサルヘシ

三 印度問題

印度今次ノ清勢ハ印度人ノ抱懐セル歴史的對英感情カ世界情勢ノ新展開ニヨリ表面化セシモノニシテ英國國爾尙書タリツプスハ印度屬

來直後、英印兩國間ノ決裂ハ英印兩國間ノ歴史的事情ニ基因セルモノニシテ此レカ收拾ハ歴史ヲ變更シ得サル限り不可能ナリト發表セルニ思ヒテ致ス時其ノ爭亂カ豫想以上深刻ナル様相ヲ呈シアルヲ知り得ヘシ

一 印度ノ對英抗爭政策ト英國ノ態度

對英抗爭ニハ印度國民會議派運用委員會カ指導的立場ヲ採リ英國支配權ノ拋棄要求、對英不協力、無抵抗主義、政治統治權ノ掌握或ハ英人全員ノ印度撤退及ヒ英統治權中ヨリ政治支配權ノ離脱等時機情勢ニ應シ各種主張ヲ對英抗爭戰術トシテ採用シ來レルカ如シ而シテ今次東亞情勢ノ新展開ヲ機トシ抗英ヲ表面化セシメタル結果必然的ニ英國側ノ彈壓ト激突トヲ見ルニ至レリ 即八月八日ボンベイ會議ニ出席中ノ國民會議派首腦者ネール、ガンヂー、アザットノ檢舉彈壓ニ端ヲ發シタル印度各地民衆、勞動者ト官憲トノ衝突ハ九月下旬迄ニ外電ノ報スル所ニ依レハ死傷一萬數千ヲ出

スニ至レルモノノ如シ
 斯カル情勢ニ嚮嚮セル英國ハ一方ニ於テ政略的ニ印度各派ノ分裂、
 切崩及急進自由黨、保守黨、共産黨等ヲ利用スル國內ノ分裂懷
 柔等ヲ策スルト共ニ他方嚮嚮ナル檢舉彈壓ノ舉ヲ以テ之ニ臨ミ軍
 隊ノ發砲、飛行機ノ爆撃、機銃掃射等ノ非人道的行爲ヲモ敢テシ
 要地ニ戒嚴ヲ布クト共ニシリヤ方面ヨリ増兵シ鎮壓ニ勉メツツア
 リ目下之カ治安維持ノ爲米軍増援部隊一部モ上陸セシモノノ如
 ク英米共ニ事ノ重大性ニ愕然タルト共ニ英國內ニ於テハ政府ノ印
 度政策ニ對シ強硬ナル反對決議ヲ提起セルモノアルカ如シ

(二) 印度問題ノ各國ニ及ホセル影響

印度問題ノ影響ハ西亞諸國イラン、イラク、埃及等ニ於ケル反英
 運動ヲ刺戟誘發シ埃及派遣印度軍内ニ於テハ抗命、逃亡者續出シ
 遂ニ八月十一日印度叛亂兵ノ一部ハ英指揮官ヲ射殺セル事例發生
 セリ又在南阿印度人ハガンジ一釋放運動ヲ起シツツアリテ反英熱

澎湃トシテ起リアリ

印度海外志士ノ獨立運動モ亦逐次本格的トナリ特ニビルマ、泰等
 ニ於テハ組織的ニ對内外宣傳ヲ行ヒ夫々本國ノ獨立運動ニ呼應シ
 ツツアリ

重慶ハ印度ノ騷擾ハ直接援蔣印度ルイトノ保全ニ至大ナル關係ヲ
 有スルヲ以テ極メテ憂慮シアルモ自ラ直接之カ渦中ニ捲込マルル
 ヲ惧レ時機ヲ見テ調停ニ出テントシアルモノノ如シ

東條首相ハ五月二十七日第八十臨時議會ニ於テ左ノ如ク印度問題
 ニ言及シアリ

斯クテ印度防衛ノ前進根據地ハ悉ク皇軍ノ占領スル所ト
 ナリ印度人宿望ノ蹴起獨立スヘキ絶好ノ機會ハ方ニ到来セリ

帝國ハ米英ノ兵力カ印度ニ殘存スル限りニ於テハ之ヲ徹
 底的ニ破壊セントスル牢固タル決意ヲ有スルモノナリ之カ爲無
 辜ノ印度民衆ニ禍ノ及フコトモ亦洵ニ已ムヲ得サル所ナリト

帝國ノ真意ヲ明示スル所アリ
 印度問題ノ前途ニ關シテハ尙未タ逆睹ヲ許ササルモ英國ノ所有^ス強^ク
 カナル彈壓又ハ懷柔工作ニ抗シツツ時ニ一張一弛スヘキモ印度ハ
 依然反英ノ一途ニ向フヘク豫想セラレ印度獨立ノ成否ニ對スル帝
 國ノ立場亦益々重大化スヘシト觀察ス

第三 猶ソ戦ヲ中心トスル歐洲情勢

一 今次猶ソ戦ノ特質

猶ソ開戦當初ニ於ケル猶軍作戰企圖ハ對ソ軍奇襲殲滅ニヨル徹底的戦
 力整減ト首都ヲスミコ^ニ及ルニシテ下ノ攻略占據ニヨル政略的効果ト
 ナルニ短期決戦ヲ企圖シタルモノ、如キモ今年度ノ作戰企圖ハ肆ラソ
 軍戦力整碎ニ重點ヲ指向シソ聯ノ抗戦組織ノ中核タル武力ヲ壊滅セシ
 メ以テソ聯ノ企圖呼ばスル長期抗戦態勢ヲ崩壊ニ導クト共ニ猶自身ノ
 戦力ヲ培養シ長期戦即勝ノ態勢確立ヲ覘ヒ其ノ要點ニ向ヒ迅速果敢ナ
 ル運動戦ヲ敢行セシモノ、如シ

二 猶ソ戦ノ推移ト其ノ概況

猶ソ開戦第一年次ノ奇襲進攻ハソ軍ニ對シ俘虜三百三十萬、火炮三萬
 飛行機二萬三千、戦車二萬四千以上ニ達スル大損害ヲ與ヘタルモ猶軍

ノ念願シタル決定的段階ニ至ラスソ軍ノ意外ニ執拗ナル抵抗ト冬季嚴寒所謂「冬將軍」ノ過早來襲ニヨリ大規模ナル作戰中熱ノ已ムナキニ至リ十一月下旬至戰線ニ亘リ枯涸ナル活動ヲ停止シ冬季滯陣態勢ニ入レリ

本年春季解氷ト共ニ獨軍ハ五月八日南部戰線タリミヤ半島ノケルニ對シ攻撃ヲ再開シ僅々十餘日ニシテ完全ニ之ヲ攻略セリ 同時ニ冬季間意反響ノ準備ヲ整へ獨軍前方進展ヲ阻止スヘク進攻ノ機ヲ覘ヒアリタルヲシテニ軍五十萬ノハリコフ地盤ニ於ケル大攻勢ヲ巧妙ナル誘致戰術ニヨリテ之ヲ邀撃シ赤軍第六、第九、第五十七軍ヲ完全ニ包圍シ五月上旬ヨリ二十九日ニ亘リ二十四萬ノ捕虜ヲ獲得シテ徹底的ニ潰滅セシメソ軍南部軍司令官ヲモシエンコノ更迭ヲ來サシメタリ 更ニ七月一日黒海ノ要衝セバストルノ完全ニ占領シ獨軍南方戰線側背部ノ脅威ヲ封殺シ次イテ南方作戰ヲ開始セリ 即チハリコフ殲滅戰後ソ軍ヲ急追シ戰果擴張中ナリソ獨軍ハ七月七日ドン河流域ノ要衝

三

ソ軍ノ攻勢ヲ占領シタル方面トドンパス、ニカフス方面トノ連絡ヲ遮斷スルヲ第一ノ要務トシテ先師トフオンツク元帥ノ率イルA、B兩集團ノ主力ヲ擧ケテ南下シ七月二十三日ソフ海、ドン河口ノ要塞ニストフヲ攻略シテ北コノ川ニ進入シ八月下旬迄ニ北コノ川ヲスノ大部面ニ占領シテ成就スルト共ニ、ソ軍ガ河畔ノ要衝ニ入り込ミドニ迫リ九月上旬向市突入ニ成功目下激烈ナル市街戰ヲ展開中ニシテス市ノ陥落モ目睫ニ迫リツ、アリ 向中部及北部戰線ニ於テモ俄所ニ赤軍ノ兵力ヲ消耗セシメソ軍ノ執拗ナル反響ヲ擊破シツ、アリ 獨軍ノ本年度所期セル作戰企圖ハ略々堅實ニ遂行セラレアルモノト觀察セラル

獨軍今後ノ作戰ニ對スル考察
獨軍ガ現在遂行中ノ作戰ヲ察シテ終止スヘキカ次期作戰ヲ如何ニ準備スヘキヤ等ニ關シテハ幾々ニ豫斷ヲ許サ、ル所ナルモ今次作戰ノ

戦果ヲ確保、増大シツ。其ノ間戦力ノ培養ニ勉メ長期戦態勢ヲ整備ツ企
 圖スルモノト觀察セラル。即チ作戦的ニハヌタリシテ、ドヲ攻略
 シ「ソ聯ノバン龍」ト稱セラル。ソ聯ノガ流域ヲ壓シソ聯ヲ抗戦経
 済組織ヲ脅威シツ、天然ノ障壁ニヨル捕占領地帯防護ノ態勢ヲ築ヘン
 カ爲引續キツルガ河ロアストンハンノ占領ヲ企圖スヘク目下既ニ其
 ノ先鋒ハゴリジダ方面ヨリアストンハンノ北方二十里ニ迫リ一部ハン
 イダツ、アストラハンノ連絡路線ヲ切斷シ裏海沿岸ニ到達シツ、アリ
 コノカサス方面ニ於テハ北コノカサスノ占領及バシ、油田地帯ノ崩
 ヲ以テ目的ヲ達シ待ヘク海軍艦隊ノ奪取ニヨル攻略的土耳其ノ懷柔
 策ハ當然企圖セラルヘシ。南部コノカサスヘノ進出ハ全ク作戦的意義
 ヲ具ニシ對ソ作戦ト論ハンヨリハ西亞作戦ノ前提トシテノ意義ヲ
 有スルモノト謂フヘシ。

今次作戦ハ概ネ以上ヲ以テ終未ト看ルヘキモ昨年度冬季作戦ノ經驗ヲ
 有スル獨軍ハ今次作戦ニ引續ク中部、北部等爾他ノ方面ニ於ケル作戦
 ニ際シテシ之カ強行ハ必ラスシモ不可能事ニハ非サルヘシト觀察セラ
 ル。

ソ聯情勢

南部戦線ニ於ケル敗退ハソ聯ヲシテ深刻ニ事態ノ重大危機ヲ認識セシ
 メタルモノ、如ク政府當局者ハ率直ニ祖國現實ノ危機ヲ表明シ愛國主
 義的志氣ノ昂揚ト死守抗戦ヲ網叫セシムルニ至レリ。スタールンハ七
 月三十一日死守抗戦命令ヲ發スルト共ニ大量殺動並ニスウチ、勅
 章トウゾフ、アレクサンルホフ勅章ノ制定ヲ發表シ赤軍志氣昂揚
 ニ努メルト共ニ新篇ヲ發行シ財政ノ強化策並ニ食糧ノ増配等ニヨル
 國內安定策ヲ實行シツ、アリ。一般民心ノ動向ハ一部インテリ階級ノ
 深刻ナル内心的危惧ヲ除キ大衆ハ現戦況ニ對シテハ大ナル不安動搖ハ
 シシアラス。其國內的結束ハ依然強固ナルモノアリ。

〔ド〕ンバヌ及北コノカサス喪失ノソ聯ニ與フル影響

ドンパス及北コーカサスノ喪失カ直ニソ聯抗戰經濟組織崩壊ノ前途ニ重大關係ヲ齎ラシ獨軍戦力培養ノ將來ニ一大強味ヲ與ヘタルハ看過シ得サル所ニシテ同時ニ北コーカサスノ喪失カソ聯ノ對西亞、對土耳其政略、外交上ニ及ホセル影響小輕視ヲ許サ、ル所ナルヘシ

英艦生産相リットルトハ七月十八日「獨軍ニヨルコーカサス石油資源ト赤軍トノ連絡遮斷並ニ獨潜水艦ノ活躍ニヨル反樞軸側船舶ノ喪失ハ對樞軸作戦遂行ノ前途ヲ危殆ニ陥ラシムルモノナリ」ト言明シ米國ノ援ソ傍英ヲ強調セリ

ドンパス地帯ハ廣表二萬五千平方キロ、豐饒ナル食糧生産地タルト共ニ鐵、工業地帯ニシテ其生産量ハ全ソ聯生産額ニ對シテ左ノ如キ比率ヲ有ス

石炭	六一% (年産八千萬噸)
コークス	大部分 (二千二百萬噸)
鐵礦	六〇%以上

各種工業生産 三〇%以上

コーカサス地帯ノ價值ハ全ソ聯生産額ノ九〇%以上ヲ占ム石油産出地タルト共ニ土耳其及西亞諸國ニ對スル政治的地位ノ重要性ニ在リ獨軍ノ掌握セルマニコフ及近ク政略セントスルタロイスミイ附近ノ石油産額ハ年産五百二十萬噸ニ上リアリ尙年産二千七百萬噸ニ達スルハシ

油出モ目下獨軍進撃ノ脅威下ニ曝サレアルヲ以テソ聯ヘノ石油輸送斷絶モ亦遠カラスト判断セラルヘシ

コーカサス地方ニ於ケルマンガンハソ聯全生産量ノ六〇%ニ達シ其他鉾鉛、セリフゲン等重要非金屬ノ産出モ豐富ニシテバシ、クロム、ニイ、ノボロジウム、スミイカド等ニ於ケル飛行機、戰車、同部分品、爆薬、火砲、機銃、小銃及化學工業工場等相當大規模ナル工業生産施設モ有リ之等生産施設ノ喪失ハ軍需物資窮乏ニ備ミツ、アルソ聯軍生産力ヲシテ益々低下セシムヘク深刻ナルソ聯ノ憂慮ヲ一層昂

メツ、アリ
②對英米關係

ハリコフ附近ノ敗退ニ次クコーカサス方面ニ於ケルソ軍ノ慘敗ニ直
面シ英米ハソ聯ノ崩壊ヲ憂慮シ且ツソ聯ノ泣訴ニ應ヘンカ爲對ソ積極
的援助ヲ目途トシ援ソ物資輸送ノ強化ト第二戰線結成實現ニヨル直接獨
戰力ノ消耗、牽制並ニ政治的精神的援助ノ効果トヲ視ヒソ軍ノ頹勢挽回
ニ資セントシ八月十九日英米聯合軍ハ佛海海岸ニツブニ上陸作戰ヲ企
圖セルモ獨守備軍ノ猛反撃ニ遭ヒ殲滅的打撃ヲ蒙リ敗退シ英米ノ企圖
ハ挫折水泡ニ歸セリ 英米ノ對ソ援助ノ實狀ハ昨年十二月ヨリ本年四
月ニ至ル五ヶ月間ニ於テ僅カニ戰車五百量、飛行機、自動車一萬五千
、食糧七十五萬噸ヲ供給シタルニ過キス 四月以降ニ於テハ僅カニ飛
行機百二十機ヲ輸送シタルノミニシテ實質的効果ハ期待シ得ス
而シテ從來ノ援ソ補給ルートタル北方アルゲンハルスルート、南方
イランルート及東方シベリアルートハ大東亞戰爭勃發ニ依ル輸送路ノ

危險増大、輸送船舶ノ擊沈損失等ニ伴ヒ何レモ輸送量ニ大ナル拘束ヲ
受ケ辛フシテ予定量ノ一割ニ降シ而モ益々減少ノ一途ヲ辿リツ、アル
モノ、如シ 北氷洋ニ於ケルソ聯船舶ニヨル物資輸送ハ一時活潑化ヲ
示セシモ氣候的制約ヲ受ケ九月以降ハ之カ實施不可能ナルヘシ 九月
二十三日米特使ウイムズノ厚スクリン首相訪問モソ聯ノ聲援的効
果以上ニハ出テサルヘクソ聯モ英米ノ實質的援助ニハ期待ヲ有セス
口現況ニ於テハ冬將軍一來訪ノ一日モ速カナルヲ庶幾シアリ 獨ソ
羅獨癖和説ノ流言モ小道教ノ事情ヨリ類推シテ強チ荒唐無稽ノ言ナリ
トハ即斷シ得サルヘシ

③對極東動向

最近ニ於ケルソ聯ノ對日態度ハ一般ニ從來ニ比シ更ニ好意的トナリ
對日刺戟ヲ極力回避シツ、アルモ他面日本ノ對ソ奇襲攻撃ヲ依然極度
ニ警戒シ秘密裡ニ戰備ヲ嚴ナラシムルト共ニ日軍ノ動向ニ對シテハ極
メテ過敏トナリ對日滿軍情ノ蒐集ニ勉メアルカ如シ

軍備擴張狀況ハ航母・潜水艦並ニ重爆・大型輸送機ニ重點ヲ指向シツ、アリ 資材・勞働力特ニ熟練工等ノ問題ヨリ幾多掣肘ヲ受ケ其ノ進捗度ハ米國ノ所期スル所ニハ到底達シ得サルヘント雖モ尙其ノ危大ナル計畫ノ遂行ニ關スル彼等ノ熱意ニ對シテ依然注視ヲ要スヘキ所ナリトス

英國ハ北阿戰線ノ失敗ニヨリ一時ハ埃及ノ危機ヲモ思ハシムルモノアリシモ南阿・英本國・米軍等ノ増援部隊到着ニヨリ小康ヲ保チアリ 然レトモトブル夕失陷時ノ南阿聯邦軍ノ大量投降及ヒ北・西阿補給路ノ不安増大ハ南阿聯邦ニ大ナル衝動ヲ與ヘ殊ニスマツツ首相ノ募兵計畫發表ヲ動機トシテ各連反英團體ノ運動熾烈化シツ、アリ 加奈陀ハ二十歳内至三十五歳ノ男子及四十歳迄ノ獨身男子ニ對スル徵兵令ヲ擴張シ増強ニ努メアリ 濠洲ハ我カ海・陸軍ノ活躍ニヨリ防備ノ脅威益々加ハリ民心ノ動搖甚大ナルモノアリ 英米ノ濠洲援助ニ對スル從來ノ認識ノ誤謬ヲ漸クニシテ認メ近時濠洲自衛ノ爲戰

備充實ヲ呼號シアリ

二

英米ノ造船不足問題

米英ノ造船不足ハ甚大ナル喪失噸數ニ對シ造船能率ノ跟隨シ得サルニ基因シ米英ノ主動的作戰指導ヲ制約シ各地ニ於ケル作戰ノ齟齬・失敗ヲ招來スルノミナラス最近ニ於テハ英國ノ食糧維持問題ニサヘ暗影ヲ投スルニ至リツ、アリ

(一) 喪失船舶量ト補給可能量

昨年度日獨伊ニヨル喪失船舶ハ約五百六十萬噸ニシテ本年上半期ニ於テハ既ニ二百萬乃至四百五十萬噸ニ上リ獨英戰開始以來ノ損失ヲ累算スレハ近海用船舶ヲ含ミ二千三百萬噸ニ達スルモノ、如シ開戰當初英米ノ所有船舶ハ拿捕・買上ケ等ヲ含ミ遠洋航行可能船舶概算四千三百萬噸ニシテ英米ハ過去ノ經驗ニ鑑ミ護送船制度ノ効果ニ對スル自信ト英米協同造船能力ノ誇大過信ニ信倚シ「絕對不敗ノ

懸勢ヲ確保シ得ヘシトノ考察ノ下ニ今次大戦ニ臨ミタリ然レトモ其ノ造船能力ハ英米相合シテ僅本年二〇〇萬噸ヲ限度トナシアルモノ、即ク日獨伊海空軍ノ活動愈々活潑化シアル現況ニ於テハ建造ハ到底墜沈ヲ償フ能ハス一年約三〇〇萬噸以上ノ不足ヲ來スヘシト豫想セララル

(二) 英國ノ絕對必要船量

英國ノ歐洲大陸ヨリ完全ニ逆封鎖ヲ受ケアル今日其ノ食糧品・原料等ハ大部ヲ米大陸及歐洲以外ノ屬領ヨリ仰カサルヲ得ス食糧品・日用品補給ノ爲ニハ最少限八〇〇萬噸ヲ必要トスヘク之ニ軍需物資並純軍用船舶ヲ加フレハ英國ノ絕對必要量ハ概ネ一五〇〇萬噸以上ナリト豫想セララルヘシ

現在英米合計所有量ハ近海用ヲモ含ミ二千三百萬噸(英國一・三〇〇萬噸)ト豫想セラレ米自体ノ軍需輸送ノ必要性ヲ考察セハ果シテ幾何量カ凌英ニ供與セラレ得ヘキヤ極メテ不安ナル狀況ニ在リト推

定シ得ヘシ

(三) 造船不足ノ影響

今後日獨伊ノ活躍ヲ以テスレハ年五〇〇萬噸以上ノ墜沈ハ蓋シ困難ナラサルヘク英米船舶困窮ヲ極限ニ壓迫シ得ルモ單ニ時期ノ問題ナリト辨シ得ヘシ

而シテ斯カル船舶不足カ米英ノ對外作戰ヲ消極不振ナラシメ印度ノ騷擾ヲ從ラニ擴大セシムルト共ニ反樞軸側ノ呼號セル第二戦線結成困難ノ原因ヲ作爲シツ、アルヲ想フトキ英米ノ深刻ナル焦慮モ又自ラ首肯シ得ラルヘシ

(四) 第二戦線問題

七月以降コトカサス戦線敗退ニヨルソ聯國內ニ敗戦不安動搖生スルヤソ聯ハ對内外政治的効果ヲ目途シ英國ニ對シ第二戦線結成ノ促進・協定ノ履行ヲ迫リ殊ニ七月下旬ス多ーリンググライド市ノ脅威増大スルヤ獨軍又軍制^{益々}英米ニ泣訴シ果テハ英米ノ不信ヲ鳴ラシ

米英ノ援助無クハ對獨單獨備和モ已ムナシト仄メカシタリ
 英米ニ於テハ第二戦線ノ結成モ現況ニ於テハ容易ナラサルヲ以テ空
 中第二戦線ヲ考慮シ英米聯合空軍ハ屢々獨逸西部及ヒ佛國・諾威海
 岸方面等ヲ占領地取ヲ空襲シアリタルモ遂ニ對内外政略上八月十九
 日佛西部海軍ヲ上陸作戦ヲ敢行シ加奈陀・米・佛ドゴール
 英本國兵等ヨリ成ル一ヶ師約一萬ヲ三ヶ地點ニ上陸セシメタルモ獨
 守備軍ノ猛反撃ニ遇ヒ捕虜一五〇〇。戦車・装甲車多致及船舶三十
 五隻撃沈破ノ大損害ヲ蒙ツテ敗退シ第二戦線結成實現ハ一朝ノ夢ト
 化シ去リ戰略的効果ハモトヨリソ聯並ニ英米ノ企圖セル政治的効果
 モ寧ロ反對効果ヲ惹起スルノ結果ニ終レリ
 蓋シ西方獨軍ニ打撃ヲ與ヘンカ爲ニハ少クモ五十萬ノ兵力ヲ要シ之
 カ輸送ノ爲ニハ最少限二五〇萬噸ノ船舶ヲ必要トシ更ニ之ニ伴フ常
 續補給ノ爲一ヶ月百萬噸ヲ降ラサル船舶ヲ要スルヲ以テ船舶不足ニ
 齒ミアル英米ニトリテ之カ實現ハ至難ノ事ニ屬スヘシ

第五 北阿及西亞情勢

エジプトノ政略制覇ハ政治、經濟、外交上歐洲情勢ノ歸結ニ重大ナル意
 義ヲ有ス

英、獨伊兩軍ハ七月初旬以降アレキサンドリヤ西方六十五哩ノエル。
 アラメイン附近ニ於テ對峙ノ狀態ニ有リテ局部戦ヲ繰返ヘシ兩軍相互ニ
 優位獲得ニ努メツ、決戦ノ機ヲ視ヒツ、アルモ今日迄ニ於ケル獨伊軍ノ
 驚異的埃及國內進出作戦ノ成功ハエジプトニ對シテハ勿論、近東諸國、
 殊ニ土耳其ニ對シ政治、外交上多大ノ影響ヲ與ヘツ、アリ

一 北阿戦ノ特色ト推移

（一）北阿戦ノ特色

34 エジプトノ政略制覇ハ戰略的ニ直接地中海制海權ノ獲得、英國ノ西
 亞、近東、印度ヘノルート遮斷、印度、近東作戦ノ牽制ヲ招來シ政

めくれず

略的ニハ近東英屬領ノ英本國艦反ヲ策シ且英本國ト屬領間ノ物資補給組織ヲ一變セシメ經濟的ニ英國抗戰力ノ崩壞ヲ招來スルニ至ルヘシ

北阿戰場ハ兵用地誌的見地ヨリセハ暑熱ノ氣候及ヒ兵站補給路ト水ノ甚タシキ制約ヲ受ク迂迴機動ヲ許サ、ル長隘路戰ト稱シ得ヘシ

(二)北阿戰ノ推移狀況

昭和十五年九月伊軍ハリビヤ、エジプトノ國境ヲ突破、侵入シ一部ハマルサ・マトール附近ニ迄進出シタルモ十二月ニ至リ英軍ノ反撃ニ遭ヒ國境線ヨリ約一千軒ヲ後退シ十六年二月辛フシテアゲイラ附近ニ止ルヲ得タリ

更ニ十六年三月伊軍ハ獨軍ノ増援ヲ得テ攻勢ニ轉シ再ヒ國境ヲ突破シソルム附近ニ達シタルモ攻ヲ刀喪失シ約半年ノ對峙ヲ續ケタル後英軍ノ攻勢移轉ニ遭ヒ十六年十一月ヨリ十七年一月ニ至ル間ニ再ヒアゲイラ附近迄撤退ヲ餘儀ナクセシメラレタリ

而シテ獨伊軍ノ今次一第三次ノ進攻ハ十七年一月末ヨリ再開セラレ二月六日ニル。自アゲイラ及ヒピルハケムヲ結フ線ニ於テ一旦停止シ五月二十六日攻勢ヲ起シ英軍ノ中央突破ニ成功、六月十四日アゲイラ攻略、六月十八日トブルク包圍ヲ完成、二十一日之ヲ陷落セシムルト共ニ爾後敵ヲ急追シテ一據ニ國境ヲ突破シ懸軍長驅、六月下旬エル・アラメインニ到着シ埃及ノ首都アレキサンドリヤ市ヲ指呼ノ間ニ望ミツ、對峙ノ状態ニ入レリ

以上ノ驚異的成功ハ獨伊軍ノ兵器上ノ改善、輸送能力ノ增強、作戰準備ノ周到及工夫進歩並ニ獨伊聯合空海軍ノ地中海ノ制壓ニ優位ヲ獲得シ得タル等ニ依ルコト勿論ナルモ大東亞戰勃發後帝國海軍ノ健闘カ英地中海艦隊ヲ弱化セシメタルニ基因セルコトモ亦看過シ得サルヘク樞軸國相互ノ聯合作戰ノ功ニ俟ツ所大ナリト謂ヒ得ヘシ

六月中旬トブルクノ危機ニ際シ英軍ハアレキサンドリヤ方面ヨリ増援大輸送船團ノ急派ヲ策シタルモマル島南方洋上ニテ獨伊空海軍

ノ捕捉擊滅スル所トナリ艦艇及船舶ト共ニ北阿ニ於ケル有力陸兵ノ大部ヲ喪失シ爾後ノ作戰ニ志氣失墜ヲ來シタル如キ、又九月十三日トブルク奪回ノ爲上陸作戰ヲ敢行セル英軍カ獨伊海空軍ノ猛反擊ニ遭ヒ多大ノ損害ヲ被リ企圖挫折ヲ來シタル如キ、地中海制海權ハ逐次獨伊軍ノ手中ニ歸シツ、アリ

埃及ノ重大危機ニ英軍ハシリヤ方面ノ第九軍ヲ増援ニ急派スルト共ニ駐埃及第八軍司令官ヲカイヒンレツク中將ニ交替セシメ又米軍ノ一部(兵力未詳)モ増援戰團ニ加入シツ、アリ

(三)北阿戰ト埃及ノ動向

英國ハ政略的ニ埃及ヲシテ全面的ニ協力セシメ戰團加入ニ迄引入ルヘク強要的態度ニ出テツ、アルモ獨コトカサス作戰ノ進撃ト土耳其ノ中立堅持ノ情勢ニ於テ多年親英的ト認メラレアリタル埃及首相ナハス・バシヤスラハ埃及ハ絶對ニ中立ヲ守リ軍隊ヲ戰爭ニ参加セシメスルト聲明シ且ツ主要都市アレクサンドリヤ、カイロ等ヨリ英

軍ノ撤退ヲ要求シ無防備都市宣言ヲ發セントスル等對英消極的不協力的態度ヲ示シアリテ全般的ニ埃及ハ反英離反ノ方面ニ向ヒツ、アリト思考セラル、所多シ

今後北阿獨伊軍ノ軍事的成功ノ歸結ニ就キテハ俄カニ豫斷ヲ許サレサルモ地中海ノ優勢、コトカサス作戰ノ有利進展及ヒ印度ノ騷擾等ノ情勢ト相關聯シ政略的ニモ戰略的ニモ埃及今後ノ動向ハ注視ヲ要スヘキモノトス

二 西亞近東狀況

西亞地方土耳其ハ極力局外中立ヲ堅持シ一般ニ其ノ歸趨不明瞭ニシテ獨コトカサス作戰ノ進歩ト北阿作戰ノ進展、印度及回教圈ノ反英抗爭等騷然タル西亞ノ情勢ニ伴ヒ西亞地中海ヲ圍ル外交政略闘争場裡ニ益々微妙ナル關係ヲ誘起セシメツ、アリ

英國ノ支配下ニ永年雌伏シアリタルイラン、イラク、シリヤ等ニ於

テ最近隠然タル反英獨立ノ氣運表面化シツ、アリ
 コレニ乘セントスル獨伊蘇ノ各種政略ハ漸次親樞軸氣運ヲ醜醜シツ
 、アリ 大東亞戰爭ニヨル日本軍ノ印度洋方面進出、該方面ニ於ケ
 ル英勢力ノ凋落ハ益々之カ氣運ヲ濃化セシメツ、アルハ注目ヲ要ス
 ル所ナリ

〔西亞ニ於ケル英蘇ノ配置兵力〕
 イラン、イラク駐英兵力ハ從來七箇師、飛行機約三〇〇機ヲ有シ
 アリタルモ印度情勢ノ逼迫ト北阿戰線ノ危機ニ伴ヒ約四箇師ノ主力
 ヲ分派シ佛ドゴール、チエツタ、ホムド兵等ヲ以テ補充シアリ
 ソ軍ハイラン國境ニ狙撃軍一、狙撃師三一四、山地騎兵師團四、裝
 甲自動車化旅團一、飛行旅團一、北部イラクニ狙撃三ヶ師團、騎兵
 二ヶ師團、戰車一ヶ師團ヲ配シテ對土耳其及近東諸國ニ備ヘアリタ
 ルモコーカサス及歐ソ戰線ノ危殆ニ伴ヒ増援ニ有力ナル部隊ヲ割キ
 目下土耳其ニ對シテハ召集補充部隊ヲ充當シツ、依然警戒シアリ

イラン進駐ノ英ソ軍關係ハ傳ヘラル如キ衝突ハナク表面平靜ヲ保持
 シアリト雖モ英ソ軍相互ニ不信、不滿ヲ露呈シ殊ニソ軍ハ英軍ヨリ
 スル物資援助契約ノ不履行ヲ不滿視スル等兩者間ノ關係必スシモ良
 好ナラス、寧ロ反目シアルモノ、如シ

イラン自體ノ兵力ハ歩兵師團二、機甲旅團二、獨立混成旅團一ニシ
 テ從前ノ兵力ノ四分ノ一ニ過キヌ 一般ニ志氣沮喪シ對英騷起ノ氣
 力ニ於テ缺ケアリト判斷セラル、モ其ノ傳統的英抗爭意識ハ世界
 情勢ノ進展如何ニヨリテハ回教徒獨立運動ニ呼應シテ烽起スル可能
 性無キニシモ非サルヘシ

イラクハ昨年五月ガイラ首相領導ノ下ニ騷起セル反英暴動鎮壓セラ
 レ親英首相ヨリサイド内閣成立セルモ純然タルアラビヤ民族ニヨリ
 形成セラレアル國民大衆ハ反英烽起ノ機ヲ視ヒアリ 四圍ノ情勢如
 何ニ依リ樞軸側ニ投スル公算多ク概シテ親獨、目的ニシテ殊ニ印度
 洋、ビルマニ進出セル皇軍ニ多大ノ興味ト信頼心ヲ寄セアルモノ、

如ク印度問題錯綜セル折柄英國ハ騎兵ヲ増強スル等イラクノ前途ハ
西亞將來ノ動向ヲ示唆スルモノトシテ關心ノ要アリト認メラル

(二) 土耳其ノ動向

土耳其ノ中立堅持ハ純然タル保守自衛ノ策ニシテ將來ノ歸趨如何
ハ一ニ獨ソ戰北阿戰ノ推移如何ニ懸リアリ 最近ノ獨コイカサス作
戰ノ好調ハ頓ニ其ノ親樞軸的傾向ニ拍車ヲ加ヘタルモノ、如シ
八月十六日土耳其ハ「蘇聯黒海艦隊ノ土耳其領港灣待避許容」申入
レヲ拒絶シ領海内ニ逃入セル艦艇二、船舶二ヲ國際法規ニヨリ武装
解除シ八月中旬英米ノナセル「黒海艦隊ノダーダネルス海峡通過容
認」強要的勸告ヲ一蹴シ中立維持ニ專念シアリ
將來ノコイカサス作戦進展如何ニ依リテハ樞軸側ヘノ参加協力所期
シ得ヘキ所ナリト觀察セララル

